

博士学位論文申請者 加藤 弘美

愛知県立大学大学院人間発達学研究科博士後期課程（2011年度入学）

博士学位申請論文題目 乳幼児期における自己鏡映像理解
一定型発達児と自閉症スペクトラム障がい児の比較から

博士の専攻分野の名称 博士（人間発達学）

審査担当者	主査	教授	望月	彰
	副査	教授	竹内	謙彰（立命館大学）
	副査	名誉教授	加藤	義信
	副査	教授	橋本	明
	副査	教授	山本	理絵

本論文の目的は、乳幼児期における自己鏡映像理解の発達過程を、定型発達児（TD児）と自閉症スペクトラム障がい児（ASD児）との比較を通して明らかにすることである。自己鏡映像とは、鏡に映った自己の映像（虚像）のことであり、本研究では、鏡とともにライブビデオ映像を媒介している。本研究では、発達段階による反応の違いを、マークテスト（子どもが鏡を見て自分の額についてマークに手を伸ばして取ることができるかどうかを観察）と対象リーチングテスト（ライブビデオ映像に映った対象の像を見て実際のモノの位置を特定することができるかどうかを観察）との比較によって明らかにしている。また、TD児とASD児の反応の違いを検討するとともに、ASD児の鏡映像への反応に特異性があるかどうかを保護者へのインタビュー調査等により明らかにしている。

論文の構成は、研究の背景および目的と方法を述べている序章を含めて5章立てである。第1章「自己鏡映像認知の成立に関わる研究の概観と課題の整理」では、これまでの比較認知研究、乳幼児研究における先行研究の分析から本研究の課題を整理している。第2章「2～3歳児における自己鏡映像理解—実験的な方法による検討」では、特にライブビデオ映像による実験の観察を通して、鏡による自己映像理解との比較、幼児の自己鏡映像（虚空間）理解の特質を考察している。第3章「ASD児とTD児の鏡映像反応の比較」では、ASD児の保護者へのインタビューとTD児のアンケート調査をもとに、特にASD児の鏡映像への反応の特異性を検討している。第4章「総括」では、第2章と第3章から得られた知見を整理し、今後の課題と展望を述べている。

本論文の特徴は、TD児における自己映像の理解に関する実験的研究とASD児の自己鏡映像理解に関する養育者へのインタビュー研究の二つの柱から成り、その意義とオリジナリティを整

理すると、以下の4点に要約できる。

第1に、TD児での実験的研究は、これまで見解の一致をみていなかったマークテスト（自己映像の認知の指標）と対象リーチングテスト（対象映像の認知の指標）のそれぞれの達成月齢の発達の関係について、後者のテストにおいて対象の位置が前方と後方となる二つの場合を導入することによって精緻に検討している。その結果、2～3歳児では、対象が子どもの後方（背後）に置かれた場合には、マークテストよりもその達成が遅くなることが明らかにされた。また、全く新しいオリジナルな実験条件として、前方、後方共に探索が可能な条件を子どもに与えることにより、後方に対象を提示した場合には前方への誤った探索が多数生ずることも明らかとなった。以上は、マークテストの通過が自己映像の表象性の理解を前提としており、また、対象映像の理解も、実空間と映像空間との写像的な全ての位置関係の一举の理解を前提としているとするこれまでの考えをくつがえすことを示唆する結果であり、映像認知研究に新しい発見的知見をもたらしたと評価できる。

第2に、本研究は、十分な対象数と時間をかけた実験的研究であり、論文の一部は当該領域で最も権威ある『発達心理学研究』（日本発達心理学会の学会誌、採択率20%前後の厳しい審査で有名）第25巻第3号（2014年）に掲載された。そのことから、本論文は、質的に見ても、博士学位論文にふさわしいレベルにあると評価できる。

第3に、ASD児の自己鏡像理解に関する養育者への半構造化面接によるインタビュー調査に基づく研究は、確定診断以前の自閉症児の鏡映像への反応や特異的な関わりを探ろうとする斬新な試みであり、これまでほとんど行われていないことから、極めて有益な知見が得られたと言える。ASD児には、自己鏡映像への興味や関心が低く社会的反応に乏しい児が多い一方で、少数ながら極端な鏡像への固執的反応を示すASD児もいることも明らかとなった。また、こうした傾向が幼児期以前の乳児期の姿勢・運動機能の発達の特異性とも関連している可能性が示唆された。

最後に第4章「総括」では、TD児とASD児のそれぞれで行われた研究手法の異なる二つの研究をつなげて、全体として子どもの自己映像認知の発達の大きな流れを描こうとする試みが行われている。これは文字通り未だ「試み」の域を出ないが、個別の実証的研究を子どもの発達の全体性を念頭においてその中に位置づけようとする著者の姿勢を示すものであり、本研究科の人間発達学研究の理念にも合致していると評価できる。

以上から、本審査委員会における審査の結果、本論文が愛知県立大学博士（人間発達学）の学位授与に相応しい水準にあると全員一致で判断した。